

アイヌ語地名から見る現北海道沙流川流域における生活空間 その変遷過程の解明 - 千年村研究その8 -

正会員 ○ 鈴木明世¹
同 中谷礼仁²

北海道 アイヌ文化 アイヌ語地名
擦文文化 オホーツク文化 集落研究

本稿は、前稿同様 2014 年度建築学会大会にて報告した「千年村研究その 1」¹ および「千年村研究その 2」² における手法を展開したものとなっている。千年村プロジェクト³ における新たな地域のプロットと該当地域の特性を検討した。

1 本研究について

現在、北海道ではアイヌ文化⁴ やそれ以前の先住民族について多様な研究が行われている。しかし、それらの研究は時間軸的なつながりこそあるものの断続的な接続として捉えられがちであり、現代までの一つの連続性のもとと考察されているものは見られない。そこで、本研究ではアイヌ語地名⁵ を地図上に可視化し、アイヌ以前から、アイヌ文化時代、そして現代までにおける生活空間の変遷過程を一つの連続した繋がりの中で見出すことを目的とする。

2 アイヌ語地名の抽出と可視化

本研究で用いた資料は北海道環境生活部アイヌ政策推進室より公開されている「アイヌ語地名リスト」⁶ である。まず、アイヌ語地名の空間プロットを「アイヌ語地名というツールを介してかつて存在したアイヌ文化と現代社会を空間的に結びつけそれを可視化する行為であると同時に、アイヌ文化時代の前後にある空間的変容をたどるひとつの手段」と定義した。その上で、リスト上の 1032 項目を類型化 [図 1] し、大字領域内にあたる 620 箇所の地名を地図上にプロットした⁷ [図 2]。

比定の類型						
単一字 大字	複数 大字	市町域 以上	和名 地名	環境 表現名	存在 しない	不明
570	50	83	84	219	18	8

図 1. 「アイヌ語地名リスト」の比定類型

3 アイヌ文化時代から現代への変遷

13 世紀頃から和人が明確に侵略を始める 17 世紀後半までをアイヌ文化時代と定義し⁸、そこから現代への連続性を考察する上で、微視的分析と巨視的分析を行った。

3-1 微視的分析：沙流川流域の実地調査

微視的分析として道央南部にある沙流川流域の 8 つの連続したアイヌ語地名⁹ の実地調査を行った。山本融定氏の論説¹⁰ と現在の集落を比較しながらアイヌ文化時代から現代までの集落形態の変化を調査し、次のことが分かった。アイヌ文化時代は高台に集落を構えており、明治政府の勸農政策（明治 4 年）により川際の低地に移転させられる。その後、水害被害を避けるように近場の山際の微高地に集落が移り変わっていった。なお、高台から低地への移動に関しては山田秀三¹¹ 他アイヌ研究者らによって述べられているが、低地における変化を詳細に辿ることにより従来の見解を補足するものとなった。

3-2 巨視的分析：アイヌ語「ル」を内包する地名について

巨視的な分析として「道」を意味するアイヌ語「ル」¹² を内包する地名¹³ に着目し、それらを昭和初期までに設

置された鉄道路線と照らし合わせた¹⁴。その結果、多くの「ル」が鉄道路線地上に存在することを確認し、鉄道路線がアイヌの「ル」と強く関連のある¹⁵ ことが判明した。

3-3 沙流川流域におけるアイヌ文化時代から現代への変遷

アイヌ文化時代は高台に集落を構え「ル」を用いて狩猟や物資の調達のための地方間移動を行っていた¹⁶。17 世紀半ば以降、和人による社会的・文化的変容¹⁷ や明治政府の勸農政策によって強制的に生活空間の変化が生じたが、近代以降、より持続可能な立地に移り住んでいった。また、広域な視点から見ると、アイヌが利用していた「ル」が鉄道路線となっており、人々が日常生活をする中でアイヌの足跡を辿ることが可能であることが分かった。これらのことから、アイヌ文化時代と現代は歴史的な認識では断続的であるが、生活空間の面では一つの連続した流れで捉えることが可能であることが分かった。

4 アイヌ以前からアイヌ文化時代への変遷

次に北海道教育委員会が公開している埋蔵文化財包蔵地¹⁸ から、7～13 世紀頃にかけて栄えた擦文文化・オホーツク文化時代¹⁹ の埋蔵文化財包蔵地（1689 箇所）を抽出しプロットすることでアイヌ語地名立地との比較を行った。[図 2] から海岸沿い、河川流域沿いなどの立地傾向に同意性を確認できるが、アイヌ語地名の方がより上流域へと広く分布していることが分かる。これは鉄器所有量や人口増加などの観点から、代価物資としての狩猟需要の増加による生業の変化によって、その集落立地の広域化が行われたためである²⁰。以上より少なくとも擦文文化・オホーツク文化時代までには集落立地傾向が確立されており、その内地への展開を可視化することにより、擦文時代からアイヌ文化時代の連続性に関する天野哲也氏²¹ の 2003 年までの研究成果を空間的側面から補足することができた。

5 沙流川流域における生活空間の変遷過程

上記考察を時間軸的に整理して、北海道における生活空間の変化を考えると、以下のように捉えることができる。

1. <空間の形成期> 7～13 世紀頃まで：擦文文化・オホーツク文化時代までに集落立地の素形が成立
2. <空間の展開期> 13 世紀以降：アイヌ文化時代に至る際に集落立地がより内地へと進出
3. <空間の変容・持続期> 17 世紀後半以降現代まで：和人によるアイヌ人の社会的・文化的変容と、明治政府の勸農政策による生活立地の変化。持続可能な立地への移行と「ル」をもとにした鉄道路線整備など、近代以降への生活空間の持続

以上より、これまでは断続的な歴史の接続として捉えられていた北海道において、沙流川流域では一つの連続した流れの中で<生活空間の段階変化>が生じていたことを見出した [図 3]。

アイヌ語地名が重要であるのは、そこに現在でも人が住み続けているからである。本稿では、まずアイヌ語地名をプロットしたことで、アイヌ文化時代とそれ以前、そして現代とを空間的に接続した。そこから、断続的な流れでの研究が多かった北海道を一つの大きな流れの中で分析する事を目的とし、大きな見取りについては示すことができた。つまり、沙流川流域において、＜空間の形成期＞＜空間の展開期＞＜空間の変容・持続期＞という＜生活空間の段階変化＞が生じていたことを見出した。

本研究では北海道を対象とした「アイヌ語地名リスト」に記載のあるアイヌ語地名のみ扱った。その中から幾ばくの傾向を見出し研究することが可能であったため、古代地名の空間プロットとその考察における一つの手法の提示ができた。千年村プロジェクトのより広範な活動に向けて応用していく次第である。

※ 本稿は 2015 年度文部科学省科学研究費助成基盤研究 (B)「国土基盤としてのく千年村」の研究とその存続のための方法開発」(26289224) による研究成果の一部である。

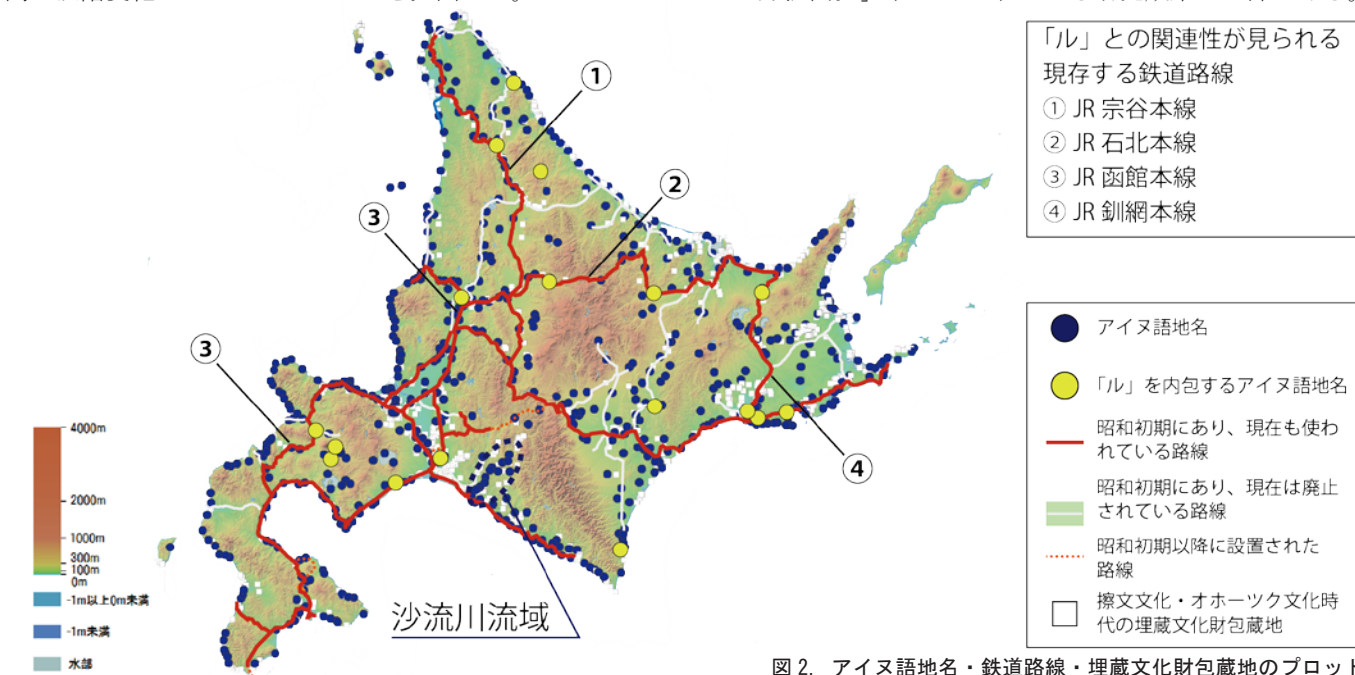


図2. アイヌ語地名・鉄道路線・埋蔵文化財包蔵地のプロット

註1 庄1 幸佑, 中谷仁他「平安期文獻『和名類聚抄』記載地名の現在比定地を用いた(千年村)抽出方法に関する研究: 千年村研究 その1」(学術講演梗概集 2014(築館文・意匠), 119-120) 庄2 幸佑, 中谷仁他「地名からみた現代社会における古代の影響に基づく地域社会評価の手法: 千年村研究 その2」(学術講演梗概集 2014(築館文・意匠), 121-122) 3 「千年村プロジェクト」ホームページ: <http://mille-vill.org/> これまでの研究領域は『倭名類聚抄』に記載のない青森・沖繩・北海道を除く地域であった。4 北海道や樺太、千島列島、ロシア、カムチャツカ半島南部にわたる地域の先住民族。独特なアイヌ語を用い狩猟採集・漁撈を産業とする。5 アイヌ語が由来となっている地名。アイヌ民族が生活に活用していた場所の名前を漢字に当てはめた。6 山田秀三『北海道の地名』(北海道新聞刊, 1984)を基盤に、北海道によって平成 11 年 9 月に設置された「アイヌ語地名普及会議」での計 3 回の検討を経て作成された。7 http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_timeilist.html (2016.04.05 現在) 7 アイヌ語地名はその場所を面的に捉えるような意味を持つものが多い。アイヌ語地名が抽象的かつ限定的な範囲を持つため、アイヌ文化と現代社会を空間的に結びつける上で、大字領域内のアイヌ語地名をプロットすることには妥当性がある。8 明確な定義はないため、本稿では人とアイヌ人の立場が明確となつたシャクシャインの戦い(1669 年)を時代の節目とする。9 下流から紫雲古津・去場・荷葉・平取小町・小平・二風谷・荷負・貫貴別 各地の報告については割愛する。10 参照:「コタンを訪ねてーシム流川流域の人々ー」(『北海道の文化 56 号』(北海道文化財保護教会, 1987)、「コタンを訪ねてーシム流川流域の人々ー」(前掲 58 号, 1988) 著者が集落を訪れ、その他のアイヌ民族に昔の様子を聞き取り調査したとめた貴重な資料。11 アイヌ語地名研究家。東北と北海道などの多くのアイヌ語地名を現地実証により研究した。12 アイヌ民族は狩猟採集を産業としていたため、北海道の内地を移動する際は自由に山野を移動する内陸交通路を持っていた。『現実の地名から見ると、足跡も何もない、ただ通て行く筋の処でもよく呼んだ。溪流の中でも、藪を押し分けて通る処も記念である。』(山田秀三「アイヌ語の内陸交通路地名」『河野田博士没後二十年記念論文集』(北海道出版企画センター, 1983)) という記述から見るに筋や峠などの意味に近いが、ここでは便宜上「道」と置く 13 早来、俣知安、貴老路、サクル、咲来、礼弘、瑠瑠、樽前、天摩、苔多、釧路、山軽、留留、留留考、留留葉、ルベシベシ、秩父別。14 鐵道省昭和 9 年の自動車路線図参照 引引用「地名保存委員会 & 古地図」<http://www.uraken.net/chimei/railroad/index.html> 15 「明治、大正と鉄道が敷かれて行ったが、地方間の大きな山越えは、殆どが アイヌ時代の通路の筋によっている。」(同註 12) 16 参照:佐々木利和、古原敏弘、児島恭子編『街道の日本史 1> アイヌの道』(吉川弘文館, 2005) 17 松前藩による労働使役や、明治以降の言語や生活基盤の同化など。18 北海道教育委員会 北の案内内 <http://www.dokoyei.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bnh/kitanoosiekiannai.htm> 19 撿文土器を用いた撿文文化とオホーツク海沿岸で築えたオホーツク文化が混合してアイヌ文化が形成された。20 参照:笹田朋孝「北海道における鉄文化の考古学的研究ー鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心としてー」(東京大学大学院人文社会系研究科博士論文, 2008) および天野哲也「熊祭祀の起源」(東山閣, 2003) 21 北海道大学名誉教授。アイヌ文化に関する研究を行っている。

1 Graduate student, School of Science and Engineering, Waseda Univ.
2 Prof. School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

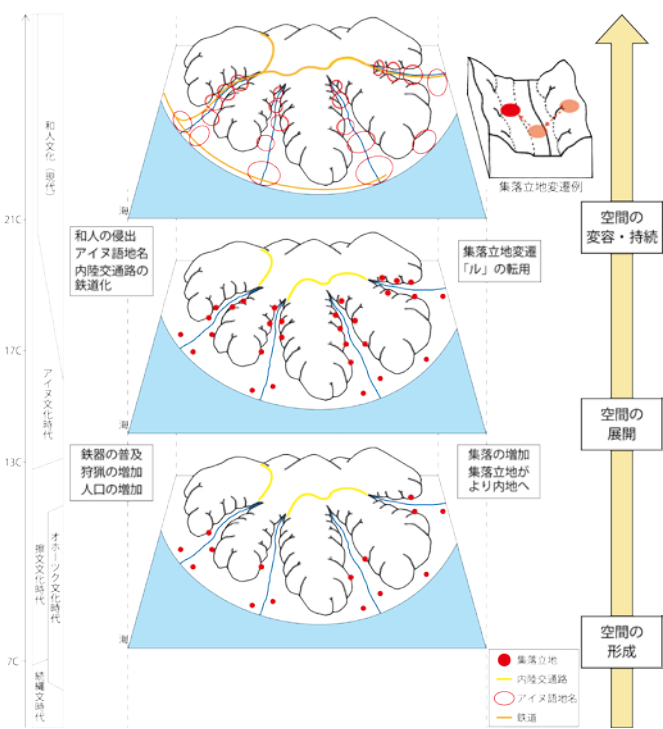


図3. 沙流川流域を事例とした＜生活空間の段階変化＞の模式図

- 1 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 修士課程
2 早稲田大学創造理工学部建築学科 教授・博士（工学）